
魔法って何？

夏香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法って何？

【Nコード】

N0852X

【作者名】

夏香

【あらすじ】

魔法の世界にある魔法学校。そこに通う一年生のシエラは特別な血を持つ魔女であった。シエラの通う学校では学科を自分で選択出来る仕組みになっている。シエラは誰も選択しない治癒学を選択した。その時からシエラの運命は動き出した。シエラが学校になじんできた時に事件が連続して起こる。それを誰かが流した噂でシエラがやったことと濡れ衣を着せられて疑いの目を持たれる。だがシエラは気にせずに学校生活を過ごして行く。でも、本来ならば交わるはずのない悪魔が襲撃してきた。その襲撃は小規模で終わった物の悪

魔はシエラの持つ力とあるモノを欲しがっていた。その後も何度も襲撃をされ、戦争勃発まで行く。そして遂に悪魔と魔法使いの戦争が始る。シエラは戦争で傷ついた人の治療に当るが遂に悪魔に居場所を付き止められてしまう。シエラは戦場にいつて一緒に戦うが最後には死んでしまう。

過去の償いから未来へ

お願いだから、もう繰り返さないでよ。

もう一度あの時と同じ様に繰り返す事があるなら…

私は全力で戦いに行きます

例えばその行為が命を落とそうと…

それが私の最後だから…

いいのです

『魔法』っていう言葉は私が生まれたときから直ぐ側にあつた言葉。
魔女の血を受け継いでいる家系の中で私の祖母と母と私は特別…いや、特殊だった。

それを知っているのは、祖母と母と仲が良かった三人。

三人は仕事関係で繋がっていた人だった。

私は彼らの顔も知らなければどんな人なのかも知らない。

ただ、知っているのは祖母と母と仲が良かったことだけ。

でも、身近にいるなんて知るよしもなかった。

身近にいる事を知るきっかけになったのはつい最近のこと、でもその前に今までのことを遡ってみよう。

波乱

桜の花びらが舞う頃、私はココ『東魔法学校』に入学した。何故、ココが、『東魔法学校』かというと、学校を創設した人が東の魔女と呼ばれていた人らしい。だから、『東魔法学校』となったの。入学式も終わり、私達一年生はそれぞれのクラスに戻っていた。私のクラスはグリーン。クラスの名前は全てカラーで分けられている。一年生は三クラスしかないから、レッドにグリーンにブルーしかクラスがない。クラスに戻ると早速先生がやってきた。

「席に着いて。」

男の先生がそういうとみんなはガヤガヤしながら自分の席についた。「みなさん、初めまして。私の名前はリユーといいます。担当する教科は魔法の歴史学を担当します。よろしく。それじゃあ、早速配る物があります。」

先生がそう言つて、杖を振った。

すると、プリントや配布物が宙に浮きそれぞれの先頭の人の机の上に人数分置いていった。みんなは「凄い！」「わあ！。」となるけど、私にしてみれば当たり前のことだった。配られてきた物に目を通しながら見ていると、隣の男の子に声を掛けられた。

「ねえ、なんていうの？」

「え？」

「名前。」

その男の子はちょっとクセ毛混じりのブラウンの髪の色をした何ともやんちゃそうな男の子だった。

「シエラ、だけど。」

「よろしく。俺はセリユウ。」

「よろしく。セリユウ。」

「よろしくな、あとで友達紹介していいか？」

「いいけど。」

セリユウに友達を紹介してもらった約束をし、私は再びプリントに目をやった。

「それじゃあ、配られたと思うので説明するぞ。」

先生の説明が始ったが、暇で暇でしようがなかったからプリントの隅に絵を書いて遊んでいた。しばらくして先生の話も終り下校時刻になった。ココの学校に来る生徒はみんな寮に住んでいる。それぞれクラスで分けられているが私は別になっている。これも“特殊”であるから学校側が配慮したこと。先生が終わりの挨拶をしてみんな荷物をまとめて寮に行く。みんなと同じタイミングで行くと玄関が混むことを考えて、私はしばらく教室にいた。

「シエラ。」

「ん？」

呼ばれた方を向くとセリユウと見かけない男子が二人いた。

「さっき言ってた友達。」

「ああ。」

一人はオドオドしている子、もう一人は生意気そうな子。という印象を受けた。

「はじめまして。俺はリュウ。」

「は、はじめまして。僕はメーリュ。」

「はじめまして。私はシエラ。よろしくね。」

すると先生がやってきて「はやく下校しなさい。」と言われた。私とセリユウ達は玄関に行き靴を履き替え学校を出た。

「それじゃあ、また明日ね。」

「え？シエラは寮じゃないの？」

「うん、ちよつとね。それじゃあ、また明日ね。」

「う…うん。」

私はセリユウたちを別れてから急いで向かった先は私がこれから住む場所である“チェリー工房”

「遅くなってスイマセン。」

玄関のドアを開けてそう言うと言見覚えのある顔の人がいた。

「シエラ、よく来てくれたわね。」

「ラズさん。お久しぶりです。」

私がラズさんと呼んだ人は、学校の保険医の先生と私の先生。私はこれからラズ先生に勉強を三年間教えて貰う。

「とりあえず、入って。」

「はい。」

工房に入るとそこは普通の家と変わらなかった。

「今日から二人暮らしね。」

「え？他の人は？」

「あれ、シエラ一人のはずよ。」

「でも、手紙に……。」

私はラズさんに手紙を見せた。

ラズさんは手紙を見ると「あゝ」と言っただけで何かを納得していたようだった。

「シエラ、この手紙ね間違っているのよ。ココで生活するのはシエラだけよ。」

「え??？」

「あとで間違えた人が来るわ。んで、シエラとりあえずランチにしましょ。」

ラズさんがランチを用意していて食べる事になった。

ランチを食べながら楽しくお喋りしていると一羽の鷹が飛んできた。

鷹は口にくわえていた荷物を下ろすと飛んでいってしまった。

「ラズさん、それは何？」

「これは、あなたの白衣よ。」

渡された箱を開けるとシエラとピンクの刺繍が入った白衣だった。

「ラズさん、ありがとう。」

「いえいえ。その白衣は実験の時に使ってたね。」

「うん。」

ラズさんから白衣を貰い心が弾んでいるとピンポーンと音がなった。

ラズさんが玄關に行っている間、私は白衣を眺めていた。

「シエラ、ちよつといい？」

「うん。」

ラズさんに呼ばれ別の部屋に行った。

「どうしたの？ あ！ 先生。」

先生は「シエラだったのか。」と言う。

「どうしていんの？」

「シエラ、落ち着いて。まず座って。」

ラズさんの隣に座り向かえにいる先生と他の二人の人をチラッと見た。

「まず、僕以外の紹介をしなきゃね。」

先生がそう言うのと女の人が自己紹介をした。女の方はユーリって言うて古代の歴史学を教える先生らしい。ユーリ先生が紹介し終るともう一人の男の人が紹介した。その人はリーユウというらしい。スポーツの先生らしい。紹介が終ると先生が口を開いた。

「単刀直入に入らせて貰うけど、君は特殊なんだね。」

先生がそう言った瞬間、私の頭に血が上った。

「私は、特殊じゃない！！」

そう言うて私は部屋を出た。

「シエラ？！」

部屋を飛び出し外に出た。

しばらくの間、“特殊”って言われていないせいか“特殊”という言葉について頭に來てしまった。“特殊”だと分かっていても、どうしてもそれを受け入れたくない自分がいた。もし、未来を変えられるんだとしたら“普通”にしてほしい。そう強く願うだろう。

部屋を飛び出して外に來てしまったものの自分がどこにいるか分からなくなってしまった。辺りは真っ暗な場所だった。

「どこだろう？」

すると足下にボールが転がってきた。それを拾い上げようとした瞬間……。鋭い閃光がはしった。

「何者だ?!」

私は自分の身に起こっている事が理解出来ずにいた。
するともう一度閃光がはしった。

「止まれ!」

「うるさい! ライト・サール」

持っていた杖で閃光のきた方に打った。

しばらくして出てきたのは赤い閃光だった。

(やばい、これ逃げた方が絶対いい。)

私は森の方に逃げた。

それでも敵は追ってくる。

「ルーン・ライト」

追ってくる敵に呪文で対抗する。

「サートル・ライン」

相手の呪文が杖を持っていた右腕に当たってしまった。

(あちゃっ…)

呪文が当たってしまい血が流れている中、光が集まっている所を発見した。私はそこに向かって全力で走った。相手からの攻撃を上手くかわしながら光のある方向に出た瞬間、ずっと暗くて見えなかった相手が見え私は咄嗟に杖を構えた。相手も杖を構えて、同時に呪文を放った。

「ブルー・レイン」

「サートル・レイン」

青く鋭いラインと赤い鋭いラインが一気に激突したが相手の力が強すぎて私の方に跳ね返ってきてしまった。

(ヤバイ!)

呼吸することも忘れかけていた時、目の前が暗くなった。

「そこまで、シューキ。」

そう言った人はさっき飛び出した部屋にいたリ्यूウ先生だった。

「大丈夫か?」

「え?」

先生が振り返えって言う。

「大丈夫……です。」

私はそう言った時、目の前が暗くなってしまった。

「ちよっ、大丈夫か？」

「先生、その子の右腕が。」

リージュウは右腕を見るやいなや直ぐにラズの元に向かった。

「ラズ、シエラが！」

運良くラズがいて薬の調査をしていたため見つけることが出来た。

ラズはシエラの傷を見て直ぐに緊急の治療を行った。

治療は長い時間行われて、ラズが処置室から出てくる頃にはもう辺りは薄暗くなっている頃だった。

「ラズ、シエラは？」

「大丈夫よ。でも傷がね。」

「傷がどうかしたのか？」

「傷跡が残っちゃうかもしれないのよ。それと、あんな傷を受けるのは上級生の呪文かもしくは、力しかないわ。何があったの？」

「シューキの呪文を受けたらしい。」

「ちよっ！シューキ君になんて？」

「立ち入り禁止の森に入ったボールを取りに行こうとして、でボールが転がった先にいたのがシエラで立ち入り禁止の森で出るモノと間違えたんだって。」

ラズは「はあ」と溜息をついた。

「リージュウ先生、幾ら何でも気を付けてください！せっかく、入学して間もないのに。それにシエラがこの先ちゃんとクラスメイトたちと馴染めるのか不安なんですから。」

「ん、大丈夫だよ。」

「どこが?!」

「何かあったら何とかするから。」

そう言ってリージュウは出て行った。

波乱の続き

目を覚ますと白い天井が見えた。

消毒液の匂いが鼻をかすめた。

（あれ…なんで寝ているんだっけ？）

そう思い体を起こすと窓から太陽の光が入っていた。

「シエラ、調子はどう？」

白衣を着たラズさんが朝食を持って入って来た。

「何かありましたっけ？」

「覚えてないの？昨日、上級生と呪文の「あ！思い出した！！」」

（そうだ！昨日、森で見つけたボールを拾って誰かと呪文のやりあいになったんだ！）

「シエラ、今日はどうする？」

「え？」

「ホントは学校の時間なんだけど…」

「どうしよう…」

「一日休んでもいいのよ。」

私は考えた結果、途中から行くことにした。

「よし、そしたら、朝食食べてね。それと制服届いているわよ。あと朝食食べている間傷の手当てさせてね。」

「傷？」

「昨日、上級生の呪文受けて右腕に大きな傷を受けたのよ。」

サンドイッチを食べながらラズさんが私の右腕の包帯を取っていく。モキュモキュとサンドイッチを食べているとラズさんが「え…」と驚いた。

「どうしたんですか？」

「傷が治ってる。」

「あ、ホントだ。」

ラズさんは右腕をじっと見つめていた。その間にサンドイッチを完

食した。

「ラズさん、制服どこですか？」

「…あ、ここよ。」

ラズさんから制服の箱を受け取り、制服を取り出した。

「あ、可愛い。」

私は早速着替え、鏡の前に立った。

「わぁ、可愛い。」

「シエラ、似合ってるわよ。それと、お弁当作っというたよ。」

「ありがとうございます。」

お弁当を受け取り鞆に入れて学校に向かった。

入学して初めての日なのに途中から行くという形になって、少しシヨックだった。靴を履き替えてクラスに向かっている最中に運良く休憩の鐘がなった。

（良かった）

教室のドアを少しだけ開けるとみんなワイワイガヤガヤやっていて入りやすかった。

自分の席に行き鞆を置くとセリユウが声をかけてきた。

「シエラ、おはよう。今日は遅れてきてどうしたんだよ？」

「ああ、具合悪くて。」

流石に寝坊だなんて言え無く、咄嗟に嘘をついた。

「大丈夫か？」

「う…うん」

するとメーリユとリュウが何かを持ってやって来た。

「おはよ。メーリユにリュウ。」

「はよ。」

「おはよ。」

「何持ってるの？」

メーリユに見せて貰うと何かの予定表だった。

「フットボール？」

「うん。部活の予定表だよ。」

「へー、部活ね。」

「シエラは何部に入るんだよ。」

リュウが聞いてきた。

「私は入らないよ。」

「何でだ？マネとかは？」

「やらないよ。楽な方が好きだし。」

メーリユはさっきのプリントをセリュウに渡した。

すると休憩終了の鐘が鳴り、みんな席に着いた。

窓側でぽかぽか陽気に包まれている教室は暖かく寝るには最高の場所だった。

私は気配を消して寝た。

「シエラ、シエラ。起きてよ。」

「ん、もう少し。」

「お昼になったよ。」

「ん！！起きる。」

目の前にはリュウがいて両隣にはセリュウがいた。

「起きたか、メシ行くぞ。」

リュウに言われて屋上に私達は行った。

適当な場所に座って昼食をとった。

「ねえ、さっき先生何の話してたの？」

「え？お前聞いてなかったの？」

「寝てた。」

「「「！！！！」」」

「ずっと寝てたのかよ。」

「そうだけど。ねえ、リュウ、タコさんウィンナー頂戴。」

リュウが「いいよ。」という前にタコさんウィンナーを頂戴した。

「あ、お前！」

「まあまあ、明日なんかあげるから。」

「全く。」

四人で楽しく弁当を食べながら話していると上級生の人が私達の元にやって来た。

「よ、仲良し…四人組?!」

「…「こんにちわ。」」

「こんにちわ。」

セリユウ達は慌てて挨拶をした。そのワンテンポ遅れて、私も挨拶をした。

背が高い四人の同級生はどうやら三人の先輩らしい。

「なあ、シューキ。昨日、森から出てきた子。」

「え?!」

私はお弁当を食べ終えて包みに包んでいた。

「ねえ、名前は?」

「え?」

「名前。」

「シエラです。」

「シューキだ。…その、昨日はすまない。」

「何がですか?」

「腕にケガをさせてしまった。」

「大丈夫ですよ。あと残ってませんから。」

そう言つて、シューキさんに腕を見せた。シューキさんも驚いていた。

「シューキ、どうかしたか?」

「シユール、治ってる。」

「良かったじゃないか。」

シューキさんの隣にいた人はそう言った。

「?」

「お!シューキ達じゃねえか。」

「先生。」

「お!昨日の……」

「シエラです。」

「そうそう。」

リーユウ先生がニシシと笑いながらこっちに来た。

「傷は大丈夫か？」

「もう平気ですけど。」

「そっか、よかった。じゃあ、マネージャーな。決定!!」

「え？」

「「「えええ!!!!」」」

「嫌です。」

私は断った。只でさえ“特殊”って事を気付かれたくないのに…。

「もう決めたもん！」

「い・や・だ！」

「先生兼監督命令です！」

ムツときた私はつい魔法を使うことになる。

「やめてくれませんか？ 幾ら先生の言った事でも嫌なものは嫌なんです。」

「だってー。」

「いい加減にしてください。そう簡単に言うあなたに何が分かるんですか。普通でいたい人の気持ちなんて分からないでしょ。レイン・サーティ」

私は霧を身に包めその場から消えた。

波乱の続き3

で身を消したことは良かったが…お弁当箱を残して来てしまったことに気付いた。

(困ったよ…置いて来ちゃった。)

すると、セリユウ達が降りてきた。

「あ、シエラいた。」

「セリユウ。」

「はい、弁当箱。忘れるなよ。それにしても、さっきのつて魔法？」

「ありがとう、うん。」

「スゲえ。」

セリユウは驚いている、リユウも関心しているメーリユはキラキラした瞳をしていた。

「ごめん、私用事あるから。」

そう言つて教室に入り鞆の中にお弁当箱を入れ教室を出た。

「シエラ、帰るの？」

メーリユは少し不安そうに聞いてくる。

「ううん、ちょっとね別な所に行くだけよ。じゃあ、また明日。」

私はそう言つてチェリー工房に戻った。

ラズさんにばれないように玄関に入つて音を立てずに自分の部屋に行く。

「ふう。」

昨日、ラズさんに部屋を教えていて貰ったから良かったと思い、鞆を机の横に掛け制服から私服に着替えてベッドに横になった。

「魔法…か。」

私は魔法を使わなければ良かったと後悔をした。

“特殊”だったせいなのか魔法が使えるのが他の子より早く、本で読んだことを一回でほぼ覚えているということがあり昔から関心さ

れる一方で気味悪がられた。母はそれを私にばれないように頑張っていたが私は知っていた。

《コンコン》窓を叩く音が聞こえ窓を見て見ると驚がいた。窓を開けると私は窓の近くにあつた止まり木に止まった。

（なんだろう？）

ワケが分からない私は窓を閉めようとした時だった。

『おい、閉めるなよ。』

「……驚が喋った!？」

『俺だつて喋るわい。ってかココの生き物は大半喋るし。』

「……………」

『無反応かい!!』

「……いや、あまりに……ううん。何でもない。」

『お前はあまり驚かないんだな。』

「さつき、驚いたでしょ。」

『普通の生徒だったらメツチャ驚くケド。』

「もっと驚いて欲しかった？」

『そんなんじゃないよ。』

「フフフ、そう。」

私は驚との会話について頬が緩んだ。

『そついや、お前、名前は?』

「シエラよ。あなたは?」

『ワッシー。』

「……………」

私は必死で笑いを堪えた。

『おい、笑うなよ。』

「だってえ、そんなネーミングセンスのない名前……ププ……」

『しょうがないだろ……名前思いつかなかったんだから。』

「自分で決めたの?」

『ああ、そつだよ。』

「親は?」

『いないよ。とつくに死んじゃった。』

私はワッシーにいけない事を聞いてしまったと思い「ゴメン。」と謝った。

『別にいいよ。ところでさ、お前学校は？』

「早退。」

『ずる休みだな。』

「違う！…違うもん。ずる休みだったら、どれだけいいか…」

『…どうかしたのか？』

私は体育座りをして顔を埋めた。

『…おい、何があつたんだよ。』

その時だった、ドアをコンコンと叩く音が聞こえワッシーはどこかへ飛んでいってしまった。

「シエラ？帰ってきたの？」

私は慌てて杖を使い霧を出し身を隠した。

「アレ？いない。変ね。」

その時、私は森の中にいた。ここの学校には森が二つあり、昨日のいた森とは別な森にいた。そこはかつて、私がか住んでいた家がある森だった。

「お、懐かしい。確か、家まだ残っているはず。」

私は家までの道をうる覚えながら歩いて行った。

しばらく歩くと一つの小さな小屋が見えてきた。

「あ！」

私は小屋を見つけると走った。

ドアの前に立ってドアノブに手を掛け引くとドアが開いた。

家の中に入り昔を思い出す。

埃が積もっていて息苦しく直ぐに小窓を開けた。

「ふう。」

久しぶりに来た我が家は私が出て行く時と変わらなかった。

空気の入れ換えをしながら棚に上がっている写真を見た。母と祖母と写っている写真や母とや祖母との写真が少ないが残っていた。

「懐かしいな。」

写真を見ながら本棚を見ていく。そこには祖母や母が研究に使っていた本がたくさんあった。手に取り埃を払い中身をパラパラ見る。私はやっぱり似ているんだなと思う。祖母や母が薬草学に興味があったように……。私はしばらく椅子に座りボーツとしていた。すると何者かが来る気配がした。

私は直ぐ気配を消して家を出て鍵を閉めた。

数人の刺客であろう者がキョロキョロしていた。

「あんたら何者？」

「……！！！！」

「刺客なんて良い度胸じゃない。」

私は杖を構えた。

「貴様、何者だ。」

「何者つてあんたの方が何者？」

「貴様に言う必要は無い！」

「じゃあ、私も。」

そう言った時だった。相手から呪文が降りかかって来た。

「わッ！いきなり危ないじゃない。」

するとまた攻撃がかかってきた。

私はそれを避けて呪文を言う。

逃げながら呪文を言い相手は追って来ながら呪文で攻撃する。

長時間、同じ事を繰り返していると体力が無いのか段々逃げるスピードが落ちて来てしまっていた時、刺客らしき者が三人に増えた。

（あちゃー、どうしよう。）

私は一瞬の隙を相手に見せてしまい呪文に引っかかってしまい木から落ちてしまった。

その拍子に服のフードを被ってしまい前が見えない状態だった。

「痛った。」

周りを刺客に囲まれて危機的な状況。

「貴様、先ほどあの小屋で何をやっていた？」

「教えない。」

「答えなければどうなるか分かっているのか!!」

「…死が待っているだけでしょ。」

そう言つてフードを取った瞬間だった四方八方から呪文が一斉に降りかかった。

（あ…やられる）

そう思つた瞬間に脳裏に過ぎつた言葉。それをいつの間にか私は唱えた。

「ライン・リフレイン」

すると青い魔方陣が出てきた。だが、魔力がまだ弱いせいで相手の攻撃が当るうとした瞬間、どこからか別の魔法がかかってきた。

「何者???」

「何者つてことは無いだろう。」

木の影から現れた人は黒いマントを身につけていてオジサンだった。

「お前らやめろ。サラキだ。」

「…これは失礼!!」

そう言つて刺客はその人の横についた。

「お嬢さん、ケガはないかい？」

「はあ、ありませんけど…」

オジサンの顔が少し近くにあつて…どうすればいいか迷う。

「サラキだったのかよ。」

「あ、リユー。それにユーリにリユー、どうしたんだよ。」

「どうしたつて、森のアノ小屋に侵入者が入つたつて連絡が入ったから…」

リユー先生はそうサラキつていう人と話している。私の事にはどうやら気付いていないようだ。

「お前らさ、侵入者の顔を確認しろよ。」

そうサラキつていう人が言つと先生達は私の存在に気付いた。

「…サラキ、もしかして。」

「そのもしかして、お前らは自分の生徒を狙っていたんだぞ。」

サラキが怒っていった。

「全く、お前らはな。」

そうサラキが言うと三人は反省した。

「すまないな。危険な目に遇わせて。俺はサラキ。お嬢さんは？」

「シエラ。」

「もしかして…“特殊”な力の家系の子？」

「…そうですね。」

「やっぱり…一年生であの魔方陣を出せたら凄い。」

「…それは、ありがとうございます。」

私は“特殊”という言葉からはどうしても逃げられなかった。

（この人も…みんなと同じだ）

「お前らは帰ってよし。それと、しばらくぶりに帰ってきたから報告することもあるし。」

私はその場からこっそり逃げようと思ひ方法を考えた。

そして、杖を構えて霧で姿を消そうとした時だった。

「待った。」

サラキさんに手首を掴まれた。

「どこに行くの？」

「なんでですか？あなたには関係ない。」

「関係なくないよ。だって、ここの先生ー」

パシン

私はサラキさんの頬を平手打ちした。

「先生？聞き捨てなりませんね。“特殊”扱いする者が先生と名を名乗る。良い度胸していますね。刺客まで持つて。」

私は、自分で感情を止められ無かった。

「シエラ、何て事言うんだ！」

「今更、何を言うんですか。生徒一人の気持ちも分からない先生が何を言う…。私がココにいる意味って何？何ですか？」

私はそう言つて霧に身を隠し消えた。

残った先生達は呆然としていた。

「流石に痛いな。」

「何よ、こっちは守ろうとしているのに！」

「まあ、ユーリ落ち着いて。」

「…もしかして、それが嫌なんじゃないのか？」

リーユウが言った。

「特別扱いが嫌なのか…。」

「そういえば、“特殊”って言葉に敏感なのかも。」

「頬が痛い。」

四人は何となくシエラの気持ちに気付きその夜、話し合いが行われた。

私は姿を消してから一人学校のグラウンドにいた。

波乱が収まりつつあります

グラウンドに來た私は人を発見した。そこにいたのはメーリュだった。メーリュは無邪氣にボールを蹴っていた。その姿は、幼い子どものような姿で微笑ましいと同時に羨ましいと思った。

「ヤッホー、メーリュ。」

私はメーリュに声を掛けた。

「…あ、あ、シエラ。」

「よっ！」

「あ、いやこれは…その、違うんだ！別に忍び込んで…やるつもりじゃ。」

「メーリュ、何言ってるの？」

「えっと…その…」

「大丈夫だよ。私、先生に言わないから。」

そう言うときメーリュはホッと胸をなで下ろした。

「ねえ、メーリュこっち来て。」

「う…うん。」

メーリュは私の隣に座った。

「練習？フットボールだっけ？」

「うん。みんなより上手く無いから。」

「偉い偉い。」

私はメーリュの頭を撫でる。

メーリュは頬を赤くした。

「メーリュは良い子。上手くなるよ。」

「あ、ありがとう。」

「羨ましいな。」

私はつい言葉を漏らしてしまう。

「なんで？シエラは何かやらないの？」

「そうだね。」

私は科学者みたいに悩む素振りを見せて「やらないよ。」と答えた。
「なんで？」

「やりたいことない！」

私は少し威張って見せた。

「そうなの？ せっかく、魔法が使えるし何かやらないの？」

「頭が良くてもね、魔法が使えても意味が無いんだよ。」

「…え？」

メーリユは首を傾げて私を見た。

「メーリユ、普通である事を楽しみなさいよ。」

「？」

ますます首を傾げるメーリユに私は少し苦笑し来ていたフード付きのマントをメーリユに着せた。

「ありがとね、話に付き合ってくれて。体、冷やすんじゃないよ。」

そう言っただけで私はまた姿を消した。

その場に残ったメーリユは練習を再開せずにボールを片付け練習を終了させた。

再び私は姿を消し戻って来た場所は自分の部屋だった。

窓を開けていたお陰で自分の部屋に入ることが出来た。

私は窓を閉めて勉強机の椅子に座った。

（明日からは気配を消そう）

そう思っただけで窓をコンコンと鳴った。窓を開けるとワッシーがいた。

「どうしたの？」

『いやあ、どうしているかなって思ってたな。』

「ふん。」

『なんだよ、何かあったのか？』

「何にも無いけど…」

『さっきの光の森であった事件知っているか？』

「へ。」

私は知らないふりをした。

『アレ、お前だろ。』

「知らないよ。」

『そっか、そしたら俺の勘違いだな。』

ワッシーはそう言った。

「ねえ、ワッシー。」

『なんだよ。』

「もし、ワッシーが他の鷺より何か特別な力があつたらワッシーはどう？」

『どうって？』

「たとえば、誇らしいとか…」

『あゝ、そうだな。力があれば嬉しい時があるがな。でも、いつかはそれが役に立つときが来るからそれまで頑張るかな？』

「へへ。」

『何でそんなこと聞くんだよ？』

「何でもないよ…。ただ…聞いてみたかっただけ。」

『なんだよ』

「普通でありたいよ。」

そう私は呟いて顔を埋め目を瞑ると、不思議と意識が遠くにいった。

『はあ』

「なに溜息ついてんの？」

『悩める子だぞ。』

「そうね。今日、学校から途中で抜け出したらし…それに森でも…」

『ヤッパリそうだったのか…』

「特殊っていう事は周りからみれば光っている存在なのかもしれないけど、この子にとっては嫌なものなのよね。」

『ああ、コイツの母もその母親も皆、特殊を嫌っていた。でも、こつも表に出すことは無かったがな。』

「そうね。でも、もしかするとリランもサランも嫌だったのかもね。」

「

『かもね…。ねえよ、嫌だったんだよ。ずっと最後まで死ぬ最後まで嫌だったんだよ。』

「リランもサランもいつもニコニコしていたから平気だと思ってたけどそうじゃないのよね。気付いてあげていれば…もっと人生は変わったのよね。」

ラズはシェラに掛け布団を掛けてそっと部屋を出た。ワッシーはずっと止まり木にとまって寝ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0852x/>

魔法って何？

2011年11月12日13時47分発行